

日時：令和2年2月18日（火） 14：30～16：30

場所：釧路地方合同庁舎 5階 共用第1会議室

釧路湿原自然再生協議会

第9回地域づくり小委員会

議事要旨

■本日の議事次第

- 1) 利活用の取り組み1（話題提供：委員事案より）
- 2) 小委員会の取り組み（委員会事案・事務局事案）
- 3) 利活用の取り組み2（委員事案）

本日は委員からの話題提供として、マルチパーパストレイルについて、その発想に至った経緯や背景などの紹介、また、前回の小委員会から事務局で進めている、第3部実施プランの取り組み状況の報告と、今後の進め方について議論を深めていきたい。

■議事1：利活用の取り組み1

◆亀山委員からの話題提供

以前の小委員会で「周遊マルチパーパストレイル」を提案したが、釧路湿原を周遊する形で多目的に使えるトレイル（小道）があれば有効活用ができるのではないかとということで、未利用地の利用パターンを考えている。最終的には2050年のこの地域のデザインとして、自然共生社会、あるいは環境省のいう地域循環共生圏というようなことを具体的に実装したいと思っている。日本の2050年を考えるにあたり、湿原に負荷が少なく、地域住民が健やかに暮らせ、気候変動や人為的影響も緩和した優しい地域を作っていきたい。

ここで、土地利用デザインシステムという地図作りの道具を活用し、「サルルンカムイの道」というものを提案したい。その道具とはグーグルアースプロという無料かつ安全なソフトウェアで、地球上の全ての場所のデジタルマップを作成できるというもの。必要な方にはサンプルデータ提供するので、ぜひソフトウェアを落として、自分自身のマルチパーパス

レイルを描いたり、使い勝手の良さや面白さに触れてほしい。

本論に戻って、昔は農地だったけれども今は手が回らなくなって、農地として機能しない場所が増えている。それをもう一度どうにかデザインし直さないといけないのではないか。牧草地は牧草地として、畑は畑として、森林であれば更新するのもいいし、手がつけられなくなったら二次林に返すのも良いと思う。そこで、将来に対して一番大きく変わり得るのが未利用地ではないか。ここは自然再生の場なので、自然再生のための候補地を探し、自然再生のために使える場所にするのも良いかと思う。

道を作ったら何かが生まれるのではないかと思っている。ここにしかないというツーリズムが絶対にあるはずなので、そういう豊かさに出会える道として、ぜひサルルンカムイの道を考えてほしい。それをまた、次世代の方に呼びかけていきたいし、彼らがここに住みたいと思える魅力ある地域づくりについて、まず話し合うことではないだろうか。

■議事2：小委員会の取り組み

事務局からPPTにより説明。

◆ディスカッション

(委員)

カヌーのガイドラインについて、タンチョウが営巣している時期や非常に警戒する時期があったりする。またカワセミなど川の周辺に住む鳥類がいろいろいるが、これらについて利用者がどう配慮していくかが問題。タンチョウの研究者等からよく話を聞いてガイドラインに反映し、利用することと保全することが一緒に記載されていくように願いたい。

利用できる環境という意味からは、カヌーポートなどが安全な施設であるかどうか、あるいはトイレの問題もある。そうするとガイドラインができただけでは収まらなくて、合わせて設備の問題もしっかりと議論し、計画性をもって取り組んでいくことが必要ではないか。

最後にもう一点、危険箇所などについては常に新しい情報を出していかなければならない。特に、危険な場所というのは常に移動したり状況が変化したりしているので、そういうものについて、しっかりと出していくことが必要。そのへんのことも、ぜひ願いたい。

(事務局)

環境に関することや安全に関すること等については、当然専門家の意見を聞きながらガイドラインをまとめていきたいと考えている。施設に関しては事務局だけでは難しい部分

もあるので、グループヒアリング等の中で実情を踏まえて相談しながら検討していきたい。

(委員)

今の来訪者はスマートフォンで情報を集めてくるので、これだけのカヌーの地図を作るのだから、タンチョウに配慮するのは何月から何月までだとか、ここの地区は特別保護地区で立ち入ってはいけないとか、カヌーを降りたらトイレはどこだとか。そういった情報をスマートフォンの地図に届ける仕組みをぜひ作ってほしい。

(事務局)

現在、確かに情報媒体の主流がスマートフォンになっており、過去にいただいたQRコードを現地に設置するというアイデア等も含め、事務局としてもグループヒアリングの中で詰めていきながら浸透させていくことが重要と思っている。

(委員)

「湿原を楽しく安心して利用できる環境を整え、釧路湿原のブランドイメージの向上を図る」というところのブランドイメージがどのようなものなのかをはっきりさせたほうが良い。ここにしかない自然や景観、希少な動植物はもちろんだが、湿原があってこそこの地域の価値を感じながら、またみんなで守りながら、あるいは再生しながら暮らしているということを、ブランドとして具体的に打ち出すことができると良い。

ガイドラインを作って普及していかななくてはならないのはもっともだが、本当に普及したいのはマナーやルールなのではないか。マナーやルールを普及するには、ガイドラインを手にとってもらう以外にも、それが伝わる方法というのとセットで考えていかななくてはならない。観光ガイドやパンフレットなどのほうにマナーとかルールを合わせて書き込んでいくということを目指すべきではないか。

その時々情報を全部、紙に示すのは無理なので、カヌーで下る人はここにアクセスすれば全て手に入るというところに旬の情報を提供していく。旬の情報を持っている自然ガイドの方や、ビジターセンター等も既に発信しているので、そういう情報にも合わせて触れられるようにすると良い。そうするとカヌーの目的で来た人も、温根内の木道を歩きに行くかもしれないし、その逆もあるかもしれない。結果、ここでの滞在時間が増えて、そこで使うお金も増えていくのではないか。

(事務局)

事務局としても同様の考えのもと、ブランド化の問題について、地域として大切にでき

ている自然だからこそブランド価値があるのだという観点から伝えていこうということで、更新内容でもそういった部分を新規に盛り込もうとしているところだ。伝え方やさまざまな工夫といったことについては、なるべくグループヒアリングの中で皆さんの協力を得ながら、最大限できることを上手く広げていきたいと、今、準備作業を進めている。

(委員)

カヌーのルールとマナーを適用させる範囲について、どこからどこまでの川の範囲とするのか、ゴールがどこで、どこがスタートなのかということを確認したい。

もう一点、トイレやカヌーを上陸させる地点については河川管理者である開発局の考えもあると思うので、そういう横との連携を考えていただきたい。また、トイレを作るということについて、各自治体において実施することになるのかどうなのか、あるいは資金繰りの問題もあるということ踏まえたうえで協議していく必要があるのではないかと。

(事務局)

エリアについては現行のカヌーガイドラインが屈斜路湖から釧路湿原までとなっているので、同様の範囲でガイドラインを作成する予定だ。外国人や一般への情報発信方法についてはまだ固まっていないが、より多くの方に周知していくにはどのような方法があるか、どこにあれば伝わるのかなど、グループヒアリングの中でも話し合いながら進めていきたい。

施設に関しては、河川管理者である開発局として許可できるもの、できないものが出てくると思う。また、その予算や管理等といったところも、やはり関係機関と話し合いながら進めていこうと考えているところだ。

(委員)

トイレなどの施設の話や、釧路湿原のブランドイメージとは何なんだろうという話が出ているが、この小委員会だけで全てを決めてイメージを統一していくことは難しいと思っている。この小委員会が出た意見も踏まえたうえで、他の小委員会との意見交換、例えば再生普及小委員会と意見交換する場をもちながら進めていくといったことも今後必要になってくるのかなという感想を持った。

■議事3：利活用の取り組み2

事務局からPPTにより説明。

(委員)

農業事業者への見学ツアー、施設の見学会などは、本当に見せられるブランドの部分だと思うが、日本人を含む外部の方に対し、施設内に入るときに洗浄・除染をきっちりするという対策が必要。くれぐれも、最初に然るべき対策を取ったうえで招き入れ、施行するというやり方が良いと思う。

(事務局)

外から雑菌などの持ち込みのリスクもあるので、今回も長靴にビニールシートを被せるなどの対策を相談したうえで実施している。そういった部分は一度失敗すると大変なことになると思うので、引き続き留意して進めていきたい。

(委員)

地域づくり小委員会のメンバーの中に、物故者（環境アドバイザー・カウンセラーの杉山先生）の名前が載っているのはリサーチ不足ではないか。こういったことは必ずチェックしていただきたい。環境省の所長も今ここにいない。それは変だ。

第2回目の利用計画の中で、釧路湿原を一周できるフットパスやホーストレイルのライディングコースなどは既にD○で出している。しかし環境省は国立公園の特別保護地区だからできない、河川の担当の治水課でもこれはできない、あれはできないというD○の現場があるということなら、このD○は決して先に進まない。もう一度、できることは何なのか。それも今、これだけ釧路空港に近いアクセスが良いところにあるのだから、世界に目を向けた釧路湿原のD○が何なのかということ、みんなでもっと真剣に議論するべきだと思う。

(事務局)

資料に間違いがあることにつき確認したので、お詫びして訂正させていただきたい。

ご意見について、当方としては小委員会の中でできることをまず推進していこうと考えているので、ご意見、プラン等をお持ちの方は、事前に事務局等に言っていただければ、こういった場を活用してご提案して進めていただくということを考えている。

■議事4：その他

(事務局)

これまでのワークショップ等でいろいろなアイデアを出されている中に気球があった。見ていると、羅臼、当麻、紋別、有名な上士幌など、いろいろなところでやっている。今回の提案は、ただ気球をやろうというより、単純に湿原を空から眺めたら面白いのではないかと。そのことが地域の子供たちにどう繋いでいくかという話にも繋がっていきとまさに地域づくり小委員会だと思う。また、今年がちょうどラムサール40周年記念ということでイベント的に面白いタイミングである。

しかし課題も多く、いつやるのか、小委員会としてやるのか有志メンバーでやるのか、誰を対象にやるのかということもある。また具体的にどうやってお金を作るのか、協議会主体でやるのか業者が運営してお金を取ってやるのかとか、あとは自治体の協力をどうやって得るのかなど。それをなんとかできないかなと、地域づくり小委員会を裏でサポートしながらいろいろ考えているところだ。

(委員長)

こういうことが面白いのではないかといったときに提案して、自分だけではできないから、事務局等に情報を集めてもらい、例えば気球であれば、事務局にはお金がないが、観光協会や商工会議所を巻き込めば少しは出してもらえるかも、というのをやりながら、上手くやっていきませんかという話。もし上手くいくようだったら、委員事案としてこんな形で動かせないだろうかというD oを進めようという形の提案である。

(委員)

以前細岡で気球を上げていたときからカヌーのガイドをしていたが、ドローン、気球、ヘリコプターというのは騒音の問題が非常に大きい。当然、鳥類等、トレッキングをしている馬、それから私たちカヌーに対して上空を飛んでくる。カヌーを追いかけて飛んでくるドローンもいる。営巣しているタンチョウを脅かすようなドローンがいるというのも聞いている。空を使うもの、特に騒音が大きいものに関しては、よほど慎重に考えてやっていただきたい。釧路湿原の「静」という一つの大きな魅力を大切に考えていただきたいと思う。

(委員)

マルチパーパストレイルという、地上で地道にこういうことができるのではないかとということもまだやられていない中で「気球」という話だが、お金が還元できるということも夢物語で、そういうことがちゃんと分かった上でやられているわけではないので、厳しいことを言うようだが、国立公園を管理している環境省としては、これは場所や時期など十分に考えていただきたい。

(委員)

不毛の大地と言われたこの釧路湿原を活用すること、それが地域を活性化することだと私たちは訴え、各首長さんたちの合意を得た。それからすると、実施することがD oではなく、地域に還元することが先にあるはずだ。地域に還元するというコンセプトがあって、その結果としてプランがあり、D oではないか。この「地域に還元」が一丁目一番地にならないと、この話は進んでいかないというのが私の意見だ。

(事務局)

今回の提案は、そもそもやはり、事務局がきちんと頭の整理をしながら、何をやっているかというのをやらないといけないということを考え始めたのが先だ。決してお金を儲けたいというようなことを言いたいわけではなく、この自然再生をやっていることが地域にどう繋がっているかということを事務局は考えないといけないということがもともとの発想である。

■閉 会

本日の議論を踏まえて検討事項についてまとめたものを次回の小委員会で提示して、委員各位とともに議論を進めていきたい。